

かる子ちゃん



(三)

桜田

たすく
佐

鳥のおばあさんから、

「おそい、おそい、あしたまた、きなさい。」

と言われたかる子ちゃんは、しかたがありませんから、ひきかえしました。かえりみちがよくわからないでこまっているとさっきのうぐいすがとんできました。

「ケキヨ、ケキヨ、むかえにきたよ。鳥のおばあさんにあえなかつたのかい。じゃ、あしたはもっと早く行くといいや。」

と言いながら、かる子ちゃんのうちまでおくってくれました。

つぎの日は、もっと早くうちを出しました。もう道がわかったので、ひとりで出かけました。

町を通り、村を通り、畑道はたけみちを通り、たんぼ道みちを通り、山道にさしかかって、くらい森の中の、大きな杉すぎの木の下の、小さなあなの前で、かる子ちゃんは、またきのうのように、大きな声で言いました。

「おばあさん、おばあさん、お願いがあってまいりました。どうぞ中に入れてください。」

するとまた、おくのほうから、太い低い鳥の声が聞えました。

「ポーポーポー、まだおそい、まだおそい。もっと早くきなさい。」

せつかく早くきたのに、こんなふうに言われて、かる子ちゃん
はがっかりしました。悲しくなって、シクシク、シクシク、泣き
ながらうちへ帰りました。

「まあ、かる子ちゃん、どうしたの？ 今日もだめだったの？」

とおかあさんにきかれて、かる子ちゃんは泣きながら言いまし
た。

「まだ、おせいんですって。わたし、もう、行かないわ。」

そして、小鳥たちと遊ぼうと思つて、お池のそばにいくと、小
鳥たちが、いちどきにうたいだしました。

よわむしかる子、なきむしかる子、

ビービービー。

よわむしかる子、なきむしかる子、

チュンチュンチュン。

よわむしかる子、なきむしかる子、

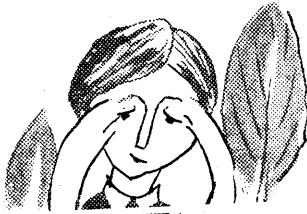
ピーチク ピーチク ピーチク。

よわむしかる子、なきむしかる子、

ポッポッポー。

よわむしかる子、なきむしかる子、

ビーグル ビーグル ビーグル。



かる子ちゃんは、ワーワー泣きだして、うちへ帰りました。お
かあさんは、

「あなたがよわむしだから、小鳥たちが、からかったのよ。あし
たの朝は、おかあさんがおこしてあげるから、けさよりも、もつ
と早くお出かけなさい。」

と言いました。

翌日、あかあさんはくらいうちにおきて、かる子ちゃんをおこ
し、

「さ、早く行ってらっしゃい。」

と、おもてに出しました。

まだ、お池はねむっていて、そのまわりには、一わの小鳥もい
ません。かる子ちゃんは、かけあしでいそぎました。

ようやく夜があげて、空が美しく光っています。かる子ちゃん
は、町を通り、村を通り、畑道はたけみちを通り、たんぼ道たんぼみちを通り、山道に
さしかかって、くらい森の中の、大きな杉すまの木の下、小さなあ
なの前にきました。かる子ちゃんは大きな声で言いました。

「おばあさん、おばあさん、お願いがあつてまいりました。どう
ぞ中に入れてください。」

すると、おくのほうから、太おとい低い鳥の声が聞えました。

「ボーボーボー、おはいり、おはいり。」

かる子ちゃんは大喜びで、からだを小さく小さくして、その小さなあなの中にはいりました。中はうすぐらくて、おくのほうにキラキラ光る二つの目玉が見えました。鳥のおばあさんの目玉です。

「おばあさん、おはようございます。」

「ああ、おはよう。なんだね、お願いというのは？」

「鳥のようにとびたいんです。」

「ふーむ、鳥のようにとびたいのか。」

「はい。」

おばあさんはかる子ちゃんをじろじろ見ていましたが、

「鳥のようにとびたいというのだな？」

と、また、ききました。

「はい。」

「そんなら、しけんがあるよ。いいかね。」

「はい。」

「では、こちらにきなさい。」

おばあさんは先にたって、かる子ちゃんをあんないしました。

くらいところをどんだんはやあしで歩きます。かる子ちゃんはか

けるようにして、あとからついていきました。くらいところをし
ばらく歩いて、さっきはいったのとはべつの小さなあなをくぐる
と、ひろびろとした原っぱに出ました。

やっと、おばあさんのすがたがわかりました。頭あたまはふくろうの
ようにまるく、くちばしはわしのようにまがり、はねの色はから
すのようになまっくろです。

「さ、ここがしけんじょうだ。そ
のきりかぶにこしかけなさい。」

「はい。」

「名まえはなんという？」

「かる子といいます。」

「とはは？」

「五つです。」

「歌がうたえるかね？」

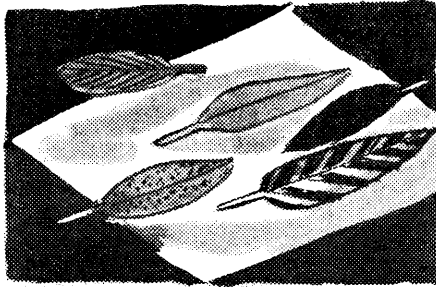
「はい。」

「じゃ、うたってみなさい。」

かる子ちゃんは口を大きく動かして、うたいました。

「おててつないで のみちを行けば

みんな かわいい 小鳥になつて



うたをうたえば くつがなる

はれたみそらに くつがなる」

「ああ、よしよし、なかなかうまいね。もう一つべつの歌をきかせてくれないか。」

そこでかる子ちゃんは、またうたいました。

「夕やけ小やけで日がくれて

山のお寺のかねがなる

おててつないでみなかえろ

からすといっしょにかえりましょ」

「うまい、うまい。だが、鳥は声がいいだけではだめなので、からだがかかるく動かせなくてはいけないのだ。片足かたあしでとべるかね」

かる子ちゃんは右足みぎあしだけで、しばらくピョンピョンとびました。とちゅうで足あしをかえて、こんどは左足ひだりあしでとびました。

「よし、よし。ついでにスキップはどうだね？」

そこでかる子ちゃんは、じょうずにスキップをしました。

「うまい、うまい、木のぼりはどうだね？」

木のぼりは、かる子ちゃんなんでもしていますから、うまいものです。そこにある杉すぎの木のとっぺんまで、すすすーとのぼりしました。

「おりてごらん。」

かる子ちゃんは、すすすーと、すぐに下までおりてきました。

「うむ、なかなかよくできる。それではひとつ、とべるようにしてあげよう。ちょっと待っておいで。」

こう言つて、鳥のおばあさんは、またあなの中にはいりました。が、やがてふろしき包みを口にくわえて、出てきました。それを一度かる子ちゃんの前においてから、くちばしをじょうずに動かしてふろしきをあげると、中にはいろいろのはねがいっぱいはいっていました。

「さて、どれがいいかな。」

と、鳥のおばあさんは、かる子ちゃんを横目で見ながら考えました。

「この小さいのにするかな。こっちの大きいのがいいかな。色はなにしよう。黒がいいかな。ねずみにしようか。みどりがいいかな。赤にするかな。」